

新撰領珠抄

(鷹之幸)

全

ヲ多  
553



新撰頌珠抄

全

門ヲ多10  
跡 553  
卷

新撰 頌珠抄序



我朝小倉氏故ふる昔時に流乃海宇に傳れ  
て是れをその人の書とする者其あましくなるを  
是をそのよ上古に唯維子とする事かのおもた  
しき道に其流をとりしるするに成ぬよ昔の人  
あふをそのよそのよ——— 曾し彼をそのよ  
其才をそのよそのよあやまらるるに成ぬよ  
あまらるるを撰小倉と故に流をそのよに其

先もあつた——今や其法を詳し——其書を  
以らにせし聊の然もあつた凡良家の書を  
書するに神傳を覺る所なり小唯書を  
せんぬき乃こんせしを業とす人平均廿  
と始不意を失く角——惟業の友を結て  
道は長世に妙に通き——人々世に政類を祖  
とせり是を繼ぐ者あり誰そや予門人若年時り  
堂にも其流を繼ぐ者あり乃こ平日傳言所  
乃方を集く一巻——杜邈を乞ふ其流を  
るふの傳傳ふふらこんせしを繼ぐ者あり  
然る處を去り乃意味小むりこり傳言を  
漏れぬ以後切を續たし我家乃藹奥之仲  
の秘術心を以て傳へん忽小むりこり於此書  
深く秘せし傳言を以て傳へん或やつとあや

享保庚子歲十一月十九日 中條唯業記

新撰領珠抄巻一上

目錄

- 一 雁鳥持心ゆき事
- 一 相形乃事
- 一 相形能くも虚実をんぶくきよき事
- 一 常乃肉分旦里の事
- 一 圓とりく物もく事
- 一 餅の多少にちかむ圓の引く法也
- 一 じちをまうる事
- 一 急よらちをまうてり事



の初るもそと肉をとりくりし初んの名のまゆりもそと肉  
初るもそと肉のひびくるものよきもそと肉をとりくりし

相形抄事

逸物の乃鷹の赤をさるる中一眼小丘一ゆりらの  
いふうくさつこ何を見るともも眼くらくもさるる  
て初るもそと肉一又思眼のまゆひ赤く悔を然らるる  
にんゆりし或は目あさ乃方せも古おとこり又りし  
りりたる初るもそと肉の赤く眉根あつて目も眉  
根よりけりりりり古奇にん

後乃世世のいふ初るもそと肉のまゆりもそと肉の初る

はるるもそと肉眉根へらりし初るもそと肉  
いふうくさつこ何を見るともも眼くらくもさるる  
て初るもそと肉一又思眼のまゆひ赤く悔を然らるる  
にんゆりし或は目あさ乃方せも古おとこり又りし  
りりたる初るもそと肉の赤く眉根あつて目も眉  
根よりけりりりり古奇にん





ある種は肉の丸を乃下の山とらるる

肉をうくめしそつ煮る

肉をうくめしそつ煮る昔は中一宿に力あり  
く好死と云ふなり又あり恰好をせし生  
ゆり形をうくし其上新丈又るる病つるを  
抽殺しそつ水に徳あるもの外ある  
ものなり

餌の多しやより肉のひくは防の

種は肉のひくを初人の多し餌不足あり  
しゆり入るるあり多し餌をたのしく餌を

もき思ふいしむりうちに病とあくむり又強く働くと  
肉のひくは種餌をたよ能餌を肉のひくぬれ  
やふし外のものに人を牛人万々に油取有る  
人しゆり食をせしむりよれしゆり食をよあり  
てき夜小風を話或は氣を骨——骨を折る瘦る  
ものなり

風は肉をひきつるあつ

あつてひきつる

天靴の要も肉のひくははひかひか  
種を餌あるしゆりあつて餌

と作らずしつと母をあらまきひとこふり血け  
油をとりきぬ補と成るん

うら浅んくしつ

初人の人き腎のをひせも多をのそまむとあや  
肉をひす少くはひし唯一ちをひるは肉をひ  
それ餅喰もあしつり腎の親ねり却る  
とりを授じしはるんしつと上刀ぬくふ業る  
らきしつとあはひうらをひるしつと肉に肥く後  
うらの良くする内乃肥もしつと又膝の内は飢  
きしつと脈令人志食を喰く起長はめしつと脾胃

もしつと腎らん外食もしつと又ものを喰くしつと  
すす却てそりりゆるとの脾胃りしつと形はれしつと  
食はしつとぬかしつと腎乃しつと良く根よしつと  
い腎通の羌快小正類をやくしつと居出しつと餅を  
頃しつとくひ或は腎を出しつとぬけもしつとせむ  
にんをすしつとそせせ餅をすしつと肉のほしつと  
くゆあり

・急に肉をとりして無痛す

俄小肉をとりしつととては良しつと肉をひしつと  
うらうらにおりしつと根よしつとふりて皮に肉を

其の積ふんはくはくしては流乃肉よあ川ととも  
滞るるあまのこ

病出る流乃

腎の病は川にふる生は腎をわきまよらうとさるハ勿論  
あふもは六脚のゆれよりあるありと脚のりさ  
とさる肉ひさうちのめくさる無病腎にさる  
よ大脚をさひく肉をあらんとさるあは押りさ  
物は滞るなりかもを腎を熱性ふるよ生をさる  
るも水えささるる脚の腐る意味さるさる  
はまとなり流病も起るささ小放るる腎の病

るもれおるにさか  
をさひうせ又んをさるさるさるさるさるさる  
もかのつさるさるさるさるさるさるさるさる  
せにひさるさるさるさるさるさるさるさる  
ささるさるさるさるさるさるさるさるさる  
さるさるさるさるさるさるさるさるさる

脚をにさるさるさるさるさるさるさるさる  
くさるさるさるさるさるさるさるさるさる  
病とあるさるさるさるさるさるさるさる

醫病く業相をさるる是のいふはわくは治一は  
おのよは病をわえく見付るゆへなり醫者先をたあ  
し取んしうは疾を病をとえさうくは解を  
いふなりしとさし加は病ありるる人ふあさ  
いそく麻ふもはくゆふの時最ふむりく業を司るつと  
くろえし一は醫道の油ゆとすしは麻をうたよ目  
うちをうししとさしとすく醫のうまひにあく  
を付し病のうまひ見えさるるは唯醫乃平生  
を見えさるるは醫道の行要るるし一は百子の醫を  
うすさるるは同しとさしあるまし一はは醫の見

極又書は中より一編ふははるしはるるは高小

解をうしうら尾をさるるはくあはるるの

いほりりうをさるるはく氣のうらん

尾をさるるはくくはるるはくはるるはくはるるはく

新撰・額珠抄卷之上上

新撰額珠抄巻下

目録

- 一 斤附法附を諸小仕懸る法の事
- 一 諸小仕懸る事并之例の事
- 一 諸小仕懸る事
- 一 逸物の誓い因ふ事ある事
- 一 諸小仕懸る事不命を乞ふ事
- 一 二日三日掛りひの事
- 一 初より諸小仕懸る事の江合の事
- 一 合やりの事











一の切の入とるなりはる根をあらう清いも初めは響  
い水と根ふにい水乃来るともいひく静かなる  
より眼志はんくゆを見らぬは根ふより眼志  
うくしせんうちひ中になひきをぬくうち明  
くあり答の上はく仇せとて明くはるにさゆ  
答(志し)と答ふとくよ答ゆはるをい年の完上  
と志す——は根は流るる響をいす明きになり  
うくまふも答のうよはのうか一日の見きては  
そのうらりとりあり或は音をいふとるは  
出た根ふるうくうらふ根ふるはいんを見たり

はやく廻りけとて——皆はめつうらるる根ふり  
一乃道は考うか合ま——又道前のいさるる響を  
るうらるるは音をいふとるはのうらり根ふる  
けらるるやい音をいふとるはのうらり根ふる  
大うらたのうらるるは又い道はるる若くは響を  
い道のうらりは風あるは常にいんもいんておひ  
もうらにそもいんひいんはるる

ニツカニツカ取個根のう

初く響くせたる響にそ年ニツカを取らるるは  
うらりうらるるは因ふるは響はるる



五世の時一々生く押一乃也いふは條は  
流しても此の流す一々生く一々入るは  
なりは内一々少いけし一々一々  
ま一々生く流すの流す一々生く一々  
ま一々生く一

合やりの事

合せ巻も先執に二や一々一々一々一々  
持一々乃一々一々一々一々一々一々一々  
一々一々一々一々一々一々一々一々一々  
一々一々一々一々一々一々一々一々一々  
一々一々一々一々一々一々一々一々一々

形あり一々一々一々一々一々一々一々一々  
一々一々一々一々一々一々一々一々一々  
一々一々一々一々一々一々一々一々一々  
一々一々一々一々一々一々一々一々一々  
一々一々一々一々一々一々一々一々一々  
一々一々一々一々一々一々一々一々一々

合やりの事

一々一々一々一々一々一々一々一々一々  
一々一々一々一々一々一々一々一々一々  
一々一々一々一々一々一々一々一々一々  
一々一々一々一々一々一々一々一々一々  
一々一々一々一々一々一々一々一々一々  
一々一々一々一々一々一々一々一々一々











手~~~~~

新撰領珠抄卷下尾

這一冊全部二卷由東洋龍領下之物人所不  
得探取也。有故臣余手奇貨呂后鞆積星椽回同  
寅之好騰寫与詒惟是徑寸之珠湯投而勿仗外人  
按劍焉。深恐勿忽。竇曆五乙丑年十一月冬至  
日黃擯虞王御鷹師蘇林誌



